

関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム キックオフシンポジウム 開催報告

2026 年 7 月 16 日（木）開催

1. 開催概要

行事名	関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム キックオフシンポジウム
日時	2026 年 7 月 16 日（木）13:00～16:30
会場	コンgresスクエア大阪中之島（オンライン配信併用）
開催形式	対面・オンラインのハイブリッド開催
主催	関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム 協力 京都大学
参加者	合計 241 名（現地 82 名、オンライン 159 名） ※情報交換会 50 名参加

2. 開催目的

研究データをめぐる制度・倫理・技術上の課題が複雑化し、研究者個人のみでの対応が困難となる中、図書館、URA、情報基盤、研究倫理・研究公正、法務・知財等の専門性をつなぐデータスチュワード型人材の育成が求められている。本シンポジウムは、関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアムの設立趣旨と活動計画を広く共有するとともに、国の政策・基盤整備の動向、大阪大学および京都大学における RDM 支援の実践事例を通じて、各機関が自らの規模・資源・課題に応じた支援体制を検討する契機とすることを目的に開催した。



開会挨拶
尾上 孝雄 氏
（大阪大学理事・副学長）



来賓挨拶
山本 武史 氏
（文部科学省研究振興局参
事官（情報担当）付
学術基盤整備室長）



閉会挨拶
宮本 陽一 氏
（大阪大学理事・副学長、
附属図書館長）

3. プログラム・講演概要

（1）招待講演：研究データ管理から研究データエコシステムへ

文部科学省 科学技術・学術政策研究所 林 和弘氏

林氏からは、RDM を研究者に義務を追加するための活動ではなく、研究者が自由かつ安全に、信頼される研究を進めるための「研究プロセスを設計する基盤機能」として捉える必要性が示された。デ

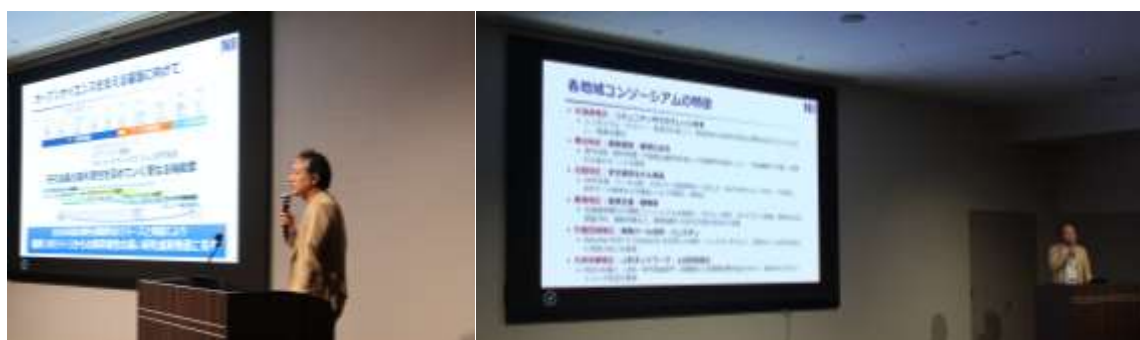
ータスチュワードは研究者と制度・基盤をつなぐ役割を担い、地域コンソーシアムは政策、実践、コミュニティを接続し、次世代の研究基盤を共創する場になり得ることが提起された。



(2) エコ事業の枠組みとコンソーシアムの将来

国立情報学研究所 山地 一禎氏

山地氏からは、NII Research Data Cloud および「AI 等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」の取組、全国各地域で進むコンソーシアム形成の状況が紹介された。即時オープンアクセス、研究セキュリティ、データガバナンス等の課題に対応するため、地域ごとの実践を共有しつつ、AI for Science 時代を支える研究データ基盤・計算資源・人材を連携させる必要性が示された。



(3) コンソーシアムの設立趣旨・人材育成計画

大阪大学 甲斐 尚人氏

甲斐氏からは、コンソーシアムが各機関の自律的な RDM 支援設計を支える「学ぶ・共有する・つながる」場であることが説明された。研修プログラムでは、国際動向・政策、倫理・研究公正、技術的基礎、分野別実践、支援サービスの設計・実装を段階的に学ぶ。目指す人材像は、一人ですべてを解決する専門家ではなく、研究者の相談を受け止め、適切な人・制度・基盤を結び、自機関に必要な支援を構想・実装できるデータスチュワード型人材である。



(4) 研究データ管理支援事例（大阪大学）

大阪大学 甲斐 尚人氏

大阪大学からは、オープンサイエンス推進室を中核とする全学横断体制、研究データポリシーの策定、学内基盤の連携、実践部局におけるユースケース、人材育成教材、相談窓口の整備等が報告された。特に、研究マネジメント総合支援システム（REMS）の開発において、研究者、図書館、研究推進、情報基盤等が共同で設計・実装したプロセス自体が、全体最適化を担う人材と隣接領域の専門人材の育成につながったことが紹介された。

(5) 研究データ管理支援体制の現状（京都大学）

京都大学 渥美 紀寿氏

京都大学からは、データ運用支援基盤センターおよび RDM コンサルタントグループを中心とする支援体制が紹介された。研究者からの相談窓口を RDM サポートセンターに一元化し、情報基盤、オープンアクセス・オープンサイエンス、URA、研究インテグリティの担当者が Slack 等を用いて連携する「分散協調型」の運用が示された。また、ポリシー策定、教育・研修、相談対応の知見をコンソーシアムに提供し、関西地区の集合知を学内支援へ還流させたいとの期待が示された。



(6) その他（コンソーシアムに関する質疑など）



作成日：2026 年 8 月 6 日

作成：関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム事務局